

日本エッセイスト・クラブ

2023 春

NO.74-III

会報



目次

日本エッセイスト・クラブ

会報

2023 春

題字 阿部 眞之助
表紙 よしだみどり
カット

「エッセー」

白いモノも黒

柳田由紀子 2

依存症を専門とする精神科医が

最近考えたこと

松本 俊彦 6

旅への誘い

安嶋 明 10

山廬の椿

戸田 淳子 14

若きらよ強く伸びゆけ

谷村 鯛夢 17

スイスからの航空便

深尾 凱子 20

バタフライエフェクトではないけれど

戸田 桂太 23

いのち

蛭川 真夫 26

再会、そして

桃井 恒和 30

エッセー募集

33

会員近況

34

事務局から

36

日本エッセイスト・クラブ定款

38

会員名

40

エッセー

白いモノも黒

この冬のロサンゼルスは珍しく雨続きで、例年になく寒い。そこにもってきて光熱費の高騰で、今月はガス代請求書の封を開けた途端に腰が抜けた。日本円にしてざっと一〇万円！さすがにこれはひどいと、州知事が連邦政府にガス会社への調査を依頼したと、先週の「ロサンゼルス・タイムズ」に書いてあった。昨年から続く大幅利上げの連続でアメリカは不況に陥る、いやいや、ソフトランディングできると議論がかまびすしいが、私は不況がくると思う。月に一〇万ものガス代を払って、誰が消費にこそしめましようか。

柳田 由紀子

(会 員)

封を開いて脱力したといえば、待ちに待った注文品が届いた時もそうだった。とにかく寒いので、仕事機の足元に置いた小さな電気ストーブをフル稼働させていたら、ある日、プツンと壊れてしまった。慌てて家電店に行くと、サーモダのタイマーだのリモコン付きだのムズカシイ製品が並んでいたの、カタログから昔ながらのバカみたいに単純な「黒いストーブ」を選んで注文しておいたのである。

だが、開けたダンボールから現れたのは「白いストーブ」だった。グレーとかこげ茶じゃないくて新雪のごとき白。なんでわざわざ白なの

よ?

この件をフェイスブックに投稿したところ、友人たちの反応が興味深かった。驚いたり憤っ

柳田 由紀子（やなぎだ・ゆきこ）



1963年、東

京生まれ。ノンフ

イクション作家。

85年早稲田大学第

一文学部演劇専攻

卒業後、新潮社入

社。月刊「03」「SINRA」「芸術新潮」の編集に携わる。98年、スタンフォード大学他でジャーナリズムを学ぶ。2001年、渡米。現在、アメリカ人の夫とロサンゼルス郊外に暮らす。著書に『二世兵士 激戦の記録——日系アメリカ人の第二次大戦』（新潮新書）、翻訳書に『ゼン・オブ・ステイプ・ジョブズ』（集英社インタナショナル）他。2021年『宿無し弘文——ステイプ・ジョブズの禅僧』で第69回日本エッセイスト・クラブ賞受賞。

たり、「返品できないの?」と真剣に心配してくれたのは日本に住む友だち。反対に、アメリカ在住者は、笑顔の絵文字や「やっぱり」と書き込んでいた。同じ経験を重ねた同胞たちは、こんな時は「白いモノを黒」と思うのがいちばんと知っているのだ。目くじら立てて返品などすれば、別のトラブルが待っている。



黒いストーブを頼んだら、白いのが届いた

と、渡米から二〇年、たいていのことは「アメリカ、あるある」と流せるようになった私だが、この冬は泣きなくなった出来事もあった。

お世話になった方に贈り物を郵送したところ、理由もなく戻ってきてしまったのだ。それも二度も。しかも、二度目はプライオリティというコウキウな方法を選んだというのに。しかし、泣きべそ顔の私をよそに受取人（のはずだった人）も家人も、「郵便局ってそんなもん」と驚いたふうでもない。何事もネイティブにはかない。

アメリカは多様性の国だとつくづく思う。毎年たくさんやって来る移民のなかには、「宛先」や「色」などという些末なことにこだわらないほうが気が楽といった文化圏から来た人々も多



郵便配達夫は二度郵便物を戻す

いのだろう。そういう人たちが倉庫に集い配送するのだ。なんだって起きる。

留学生だった昔、アメリカ史のクラスで「へっ？」と思ったことがある。先史から始めた授業が独立戦争を経た頃、教科書に「一七九二年、合衆国造幣局誕生」の記述を見つけた。イギリスから清教徒たちが到着してから二〇〇年近くが過ぎている。では、それまでどんな通貨を使用していたのか？

教授にこう尋ねると、以下の回答だった。

「各人が祖国の通貨であるポンドやフラン、ペソなどを使い、その都度、為替レートを定め交換して暮らしていた」

大昔のことだから、為替レートも各地でバラバラだったという。

思うに、アメリカは今もこの延長線上に生きている。アメリカに弁護士が多いのも、アメリカ人が多弁なのも多様性のせいだ。各人ばらばらの常識を収拾するには法律でさばくしかないし、自分を派手にアピールしなければ誰にもわかってもらえない。

美容整形技術が発達しているのも、このあた

りに起因すると私は踏んでいる。たまたま大統領の一般教書演説の翌日に、メイクアップ・アーティストをインタビューすると、雑談時に彼女はきっぱりと言った。

「バイデン、リフティングしてる」

私は気づかなかったが、大統領の両の首筋に縦線がはっきりと見えたという（最近の顔の皺伸ばしは、頭から引っ張って髪で隠すのではなく、首筋が主流の由）。



メイクアップ・アーティストが描いたバイデン大統領のリフティング箇所

政治家は、若々しくエネルギッシュな様を見た目からアピールしなければならない。いやあ、バイデンおじいちゃんも大変だ。自民党の二階さんや立憲の小沢さんがリフティングなんて想像もつかないし、共産党の志位さんだったらも

っと怖かったりする。
これもまた、「アメリカ、あるある」とつぶやいて、私は今朝もまた電気ストーブのスイッチをひねる。「白いモノも黒」と自分に言いかけながら。

依存症を専門とする精神科医が 最近考えたこと

松本 俊彦
(会員)

最近十年で依存症臨床がカバーする領域は急激に広がった。そして、国際的な精神障害診断分類においてギャンブル依存症とゲーム依存症が、アルコール・薬物依存症と同じ診断カテゴリーに相次いでリストされたのを機に、俄然、この問題が注目され出した。

特に状況を呈しているのはゲーム依存症だ。コロナ禍において、感染リスクのない対人交流の場としてオンラインゲームの需要が高まるにつれて、ゲーム依存症は人々の耳目を集めている。少なくとも思春期の子どもを抱える親なら

ば、とても人ごととはいえない問題だろう。

しかし皮肉なことに、ゲーム依存症をめぐる議論から浮かび上がるのは、依存症という臨床概念のいい加減さだ。筆者は、親に引きずられるようにして嫌々受診した、名門私立中学に在籍する子どもが語った言葉を、今でも忘れない。

「うちの親はゲーム依存症とかいって騒いでいるけど、結局、僕が自分たちの思い通りにならないのにイライラしているだけさ」

いつもならば、依存症者特有の「ああいえばこういう」式の屁理屈として一蹴するところで

松本 俊彦（まつもと・としひこ）



1967年生まれ。精神科医、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部長。19

93年佐賀医科大学卒。横浜市立大学病院にて初期臨床研修の後、国立横浜病院精神科、神奈川県立精神医療センター、横浜市立大学医学部附属病院精神科を経て、2004年に国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部室長に就任。その後、同研究所自殺予防総合対策センター副センター長などを経て、2015年より現職。著書に『自分を傷つけずにはいられない』（講談社2015）『もしも「死にたい」と言われたら』（中外医学社2015）『薬物依存症』（ちくま新書2018）『誰がために医師はいる―クスリとヒトの現代論』（第70回日本エッセイスト・クラブ賞受賞・みすず書房2021）他多数。

あったが、そのときにはなぜか納得してしまう自分がいた。

「確かにそうだ。もしもこの子が寝食忘れ、友だちとの交流も断って勉強に没頭していたとしても、親は『勉強依存症』と騒いで相談に来たりはしなかったのではないか」

誤解をしないでほしいのだが、ゲーム依存症など病気ではないといいたいのではない。それどころか、ギャンブルやゲームのような「非化学物質」こそが依存症の本質を示してくれる気さえしている。

人類の歴史を回顧してみるとよい。歴史上最も古いアディクションに関する記述は、物質使用ではなく、病的な賭博だ。紀元前千年頃の古代インドの聖典『リグ・ヴェーダ』や叙事詩『マハーバーラタ』には、サイコロ賭博に勝って王となる者や、負けてすべて失う王の姿が描かれている。

賭博に比べれば、化学物質の依存症など、人類の歴史においては新参者というべきかもしれない。筆者が知り得たかぎり最も古い物質依存症は、賭博に遅れること六百年、紀元前四世紀

頃における、アレキサンダー大王の酒癖に関するエピソードだ。彼は、中央アジア遠征中、夜な夜な酔い潰れて放蕩のかぎりを尽くしたばかりか、酔った勢いで征服した都市を火の海にしたり、腹心の重臣を殺害したりし、最後は大酒が原因で三十代前半の若さで早逝している。

ちなみに、その次に古いのは、紀元後二世紀頃、古代ローマ帝国五賢帝最後の哲人皇帝マルクス・アントニウス・アウレリウスのアヘン常用だ。彼は、日中はほとんど食事をとらず、しきりとケシのの実の抽出液を混ぜた薬——いわゆる「生アヘン」だ——を摂取していたという。

彼の著書『自省録』には、「自分の身にかかることは制御できないが、人生で起こる出来事に対する自分の反応は制御できる」という彼ならではの哲学的信念がくりかえし語られているが、その実践はアヘンなしにはできなかったという疑いがある。アヘンがもたらす心理的麻痺状態は、執務のストレスや思うにまかせぬ執政につきものの怒りや不安を鎮めてくれたことだろう。ともあれ、人類最初のアディクションが賭博であったという事実は、依存症の本質を考える

うえで重要なことのように感じられる。植草啓司は、ギャンブルに関する文化人類学的考察のなかで、「創世の頃より人間の最も根源的な欲望は未来を知ることであり、だからこそ、人間は、予測不能な未来を予測可能なものにしようとして、木の枝や小石や骨片を投げて吉凶を占いはじめたのではないか」と指摘している。

さすがの慧眼だと思う。おそらくその儀式は、象徴化と通俗化を経て、個人の財産をかけた「賭博」へと姿を変え、さらに賭博に、個人の能力や技術によって結果を左右できる要素が付加されて、決闘から様々なスポーツ、はてはチェス、囲碁、将棋までを含む「ゲーム」へと発展した。いずれのゲームも、戦争のミニチュアとして、最初は軍事作戦策定や軍事訓練に用いられ、長じて人生のミニチュアとして庶民の娯楽となった……そう考えるのが自然だろう。

ここに依存症の本質があるのではないか。制御不能な〈現在〉を制御し、予測不能な〈未来〉を予測したいという欲望が、人間を依存症の餌食にする——ある者は、運命に翻弄される不安を化学物質で制御し、またある者は、運命のミ

ニチュアを弄して自らを「神」の視座に置き、まやかしの万能感に酔うことで不安から目を背ける。そして、現在と未来に関する不安が低減されることが一種の「報酬」となって、それはますます私たちを「沼らせる」のだ。

とりわけ、後者の代表、ギャンブルやゲームといった嗜癖行動から見え隠れするのは、それこそ「一寸先は闇」的状况において、不安に打ち震えながらも、生に執着し、依然、投企を諦めない、小さき人間の姿である。

診療室で出会ったあの名門私立中学の子どももそうだった。かつて神童の名をほしいままにした彼も、秀才ばかりの中学校では平凡な生徒にすぎなかった。そして、思春期の入り口に立ち、その先の見えない未来に圧倒されていた。

秀才だらけの学校で抜きん出ること比べれば、ゲームは、費やした時間と労力がそのまま得点に反映されやすく、周囲からの評価を得るのがはるかにたやすい。課金というドーピングまがいの「飛び道具」さえある。そのまやかしの万能感は、一瞬だけ「一寸先の不安」から目を背ける手助けをしてくれるのだろう。

考えれば考えるほど、依存症はきわめて人間臭い病気だと思ふのだ。

引用文献

植島啓司…オピニオンギャンブルの文化人類学。未来を知るために。情報&オピニオン imidas。
<https://imidas.jp/jiikaitai/1-40-233-17-04-g666>

エッセー

旅への誘い^{いざな}

古希を間近にしながら、時代遅れも甚だしい「昭和」の働き方を余儀なくされている私のささやかな望みは、文庫を入れた鞆を肩に掛けて行先の定まらない旅に出ることである。

振り返ると、もう随分昔、学生時代にはそうした旅をしていた。先立つものはなかったが時間はあった。夕暮れ時にたどり着いた名も知らぬ町で何とか民宿を探し当てる、空き部屋はないが「テレビ付きです」と言われて宿泊客が行き来する玄關脇の廊下に泊まらせてもらったこともあった。

行く先々で日頃は出会わない人たちと遭遇し

安嶋 明

(会 員)

た。会社が倒産した会社員（正確には会社員ではないかもしれない）、失恋旅行中だと言っていた女子学生（顔は忘れた）、理由なくご馳走をしてくれるおじさん（今の私より若かった）等々。まさに「一期一会」、翌朝には別れ、再び出会うこともない邂逅。まさに旅の醍醐味である。

もっとも、中には例外的に複数回交流した友人もいた。最初の出会いがどこだったか忘れたが、某有名私大に通い「アングラ演劇」にはまっていた彼は、新宿花園神社の紅テント、黒テントの話を熱く語りながら言った。

「若者よ、書を捨てよ、旅に出よ！」

安嶋 明（やすじま・あきら）



1955年東京生まれ。1979年東京大学経済学部卒業後旧日本興業銀行に入行。2001年末まで勤

務。この間、主に投資金融業務を担当、ロンドンに7年、香港に6年駐在。2001年末、プライベートエグゼクティブ部長を最後に興銀を退職。2002年2月、わが国初の「事業再生ファンド」運営会社である「日本みらいキャピタル」を創設。以来代表取締役社長。一般社団法人事業再生実務家協会常議員、経済産業省早期事業再生研究会、地域中小企業活性化政策委託事業委員、「第四次産業革命クリエイティブ研究会」招聘委員ほかを歴任。財界人文芸誌『ほほづゑ』編集世話人。日本認知科学会・組織学会・日本文化人類学会会員。近著に『学びほぐし』が会社を再生する―企業とファンドの組織変革物語』（岩波書店）

今考えると、当時こうした行き当たりばったりの旅が出来た理由はいくつかある。時間はその決定的必要条件だが、日本の気候・風土や、地方都市にそれなりに人口が密集する生活圏が存在することも挙げられる。改めて思い起こすと、宿泊先を探すのに苦労はしても、駅舎で夜を明かすようなことはなかった。

それなりの佇まいの駅に降り立てば、何処かしら泊まれそうな宿にたどり着けた。

季節や行先を間違えなければ気候温暖な我が国では基本的に凍死あるいは熱中症で倒れるリスクは少ない。その後、社会人になってから、零下四十度のモスクワを訪れ、また赤道直下、見渡す限り家屋も人の姿も見えないケニアとタンザニアの国境線を歩いたとき、こんなところで放り出されたら直ちに生命の危機に直結すると実感したものである。

和辻哲郎は著書『風土』の中で、次のように述べている。

《我々は花を散らす風において歓びあるいは傷むところの我々自身を見出すごとく、ひでりのころに樹木を直射する日光において心萎える

我々自身を了解する。すなわち我々は「風土」において我々自身を、間柄としての我々自身を見いだすのである。》

和辻はここで「風土」を単なる外的環境に留まらず、人々の精神構造に刻み込まれた自己了解の仕方として捉えた。そんな和辻が、最近の「命にかかわる猛暑」や「本州を東から西に逆走する台風」を知ったら一体何と言うだろうか。我々日本人の自己了解のあり方もまた危機に瀕しているということか。

「命にかかわる」と言えば、「旅」は今でこそレジャーの王道であるものの、その昔、鉄道も車もない時代には、それこそ「命がけ」の一大イベントであった。人々は「行きがかり」ではなく、何かしら明確な目的を持って旅に出た。時には、今生の別れになるやもしれぬ水盃を交わしながら。

宝生流の「ワキ方」としてユニークな能楽論を展開している安田登は、松尾芭蕉の「おくのほそ道」の大半をフィクションとしつつ、芭蕉は江戸幕府安定のために、怨霊化した源義経の霊魂を慰めることを使命としていたと述べてい

る。そのおよそ五百年前、鳥羽院の北面武士であった俗名佐藤義清こと西行が、保元の乱で敗れて失意のうちに流罪先で客死した崇徳院の霊を鎮魂するために旅をしたことに倣ったという。

行く春や鳥啼き魚の目は泪 芭蕉

かつて「江戸時代にも花粉症があったのでしようか」と言った輩がいたが、もちろん出立時の別れの涙である。実際そう若くはなかった芭蕉にとって決して楽とは言えない長旅だったはずである。何かしら明確な目的でもなければ成し得なかったという説は頷けなくもない。「おくのほそ道」と言うと、今や海外にも伝わるロマンの世界と捉えられがちだが、実際はもっと切実な厳しい道行であったのかもしれない。

さて、いつ果たせるとも分からない私のささやかな願望において、文庫本の携帯は必須である。無計画の旅では畢竟隙間時間が生じる。都会のように交通機関が分刻みで運営されること

などあり得ない。電車やバスに一度乗り遅れば、相当の待ち時間を覚悟せねばならない。文庫でもなければ悲惨の極みと言えよう。もちろん新書も、電子書籍もあるが、個人的には行く先の決まっていない旅の風情にはそぐわない。私にとっての一人旅は、いずれにしても「文庫を持って旅に出よ」となる。

ところで、旅先で出会った演劇学生に触発されて、その後「天井桟敷」に出かけ、寺山修司の本も読んだ結果分かったのは、寺山自身は大変な読書家であることだった。学生時代、病床に臥して読書三昧の生活を強いられた寺山が、身体の快復と共に生きる実感として親しんだのがアンドレ・ジイドの紀行詩文集『地の糧』で、「書を捨てよ、街へ出よ」は、その一節だったのである。

彼のアングラ学生君は果たしてそのことを知っていたのだろうか。

今となつては確認する術もない。

（文中敬称略）

（注） 本エッセーは、財界人文芸誌『ほほづゑ』二〇一八年秋第九十八号に掲載したものを改変したものです。

エッセー

山さんろ廬の椿

戸田 淳子

(会 員)

昨年（令和四年）夏の昼下がりのことである。私は自宅ベランダの植木鉢に茂っている露草の大株を渾身の力で引き抜いた。そしてその株に向かつて「庇を貸して母屋を取られるとはこのことだ！」と言い放った。この鉢には私にとって大切な椿の木が育っている。

その一か月ほど前から椿の葉が時折落ちていくのに気がついてはいたが植物の自然現象だと思ひながらもとめていなかった。

昨年の春先、椿の鉢の隅に露草が一本頼りなげに芽を出していたのを抜くのもかわいそうだと思ひそのままにしていた。夏のベランダで椿

と露草はお互いをやり合いながら暑さをしのいで欲しいと願っていたのである。ところがあの昼下がりに椿の葉がすべて落ち、完全に枯れ木になっていることに気がついた。露草のほうは逆に植木鉢の土も見えないほどこんもりと茂っている。ここで私はようやく気がついたのである。朝夕たっぷり注いだ水も栄養分も全てこの露草が吸いつくしていたのだということ。私は鬼の形相になり力いっぱい露草を引き抜いた。露草の花は頼りなげで美しいのに抜いてみたら茎も根も太くて驚いた。春にはか細い姿だった一株は三か月そこそこでこんなに大株に。直径四

○センチほどの鉢の中で生きてゆくには露草には露草の言い分もあろうかとは思ったが、私にとってこの椿は恩師とのかけがえのない絆の木であった。その思いがぷつりと切れたことが残念でならなかった。迂闊だった。この椿との出会いは四〇年ほど前に遡る。昭和五十六年頃であったと思うが知人からの誘いを受けて女性だけの句会に入った。和室での流れるような美

戸田 淳子（とだ・じゅんこ）



宮崎県生まれ。

昭和56年より俳句を「雲母」主宰飯田龍太氏、「雲母」終刊後は「白露」

主宰広瀬直人両氏

に師事。平成23年宮崎文学賞随筆部門一席受賞。みやさきエッセイスト・クラブ入会。同会編集長、事務局長を歴任。毎日新聞「はがき随筆」選者を経て現在のみやさきエッセイスト・クラブ理事。合同句集『あさひな』など。

しい句会の作法と交わされる古語の雅な響きが耳に心地良くて、たちまちこの短詩型の俳句に夢中になった。

そんなある日、句会の指導者から「山廬へ伺いますがご一緒しない？」と声をかけられた。その頃はすでに俳誌「雲母」に入会し主宰の飯田龍太先生の選を受けられる喜びを感じていた頃であった。その主宰のお宅に伺えることは願ってもないことだと指導者の先生と句会の仲間数人と共に胸躍らせながら中央線の電車に乗った。甲府駅に降り立つと早春の風はまだ冷たくて車中ずつとはしゃぎ通しだった頬にその風が心地よい。駅から北西の方角には雪を頂いた南アルプスの山が連なり正面は御坂山地、その奥に雪の裏富士が見える。甲府盆地は春まだ覚めずといった景色だったがその中を二台のタクシーに分乗し御坂山地に向かった。坂の中腹にある飯田邸に着くと、当時六十代半ばの龍太先生は紺の作務衣姿でにこやかに迎えてくださった。振り返ると眼下には甲府盆地が広がっている。広い庭のむこうには江戸時代から大庄屋だった飯田家の瓦葺きの大屋根が左右に大きく伸

びて美しい。母屋はほの暗く、少し目が慣れると広い土間の奥に大家族の名残の大竈が二つ、上り框の先に十五、六畳はあろうかと思える広間があり中央に大きな炉が切つてあつた。先代の飯田蛇笏先生がこの居宅を「山の粗末な建物」と表現され、それ以来「山廬」と呼ばれるようになったらしい。「芥川龍之介もしばしば訪ねてきたようですよ」、「井伏鱒二とはこの炉辺でよく酒を酌み交わしましてね」などの龍太先生の話は私どもには胸躍る話題であつた。軒に吊してある風鈴を見つけては「これが蛇笏先生のごろがねの風鈴ですか？」母屋の隣の蔵を見ては「若山牧水が逗留したのはあの蔵二階ですか？」などに見るもの聞くもの質問して、まるで好奇心旺盛の小学生であつた。やがてお宅を辞するとき門まで見送りの足を止めた龍太先生は、門扉にこぼれるように咲いている椿の花を手折り「乙女椿というんだよ」と皆に渡しながら「この木は性格のいい木でね」と言われた。

私はその枝を大切に持ち帰り横浜住まいの庭の隅に挿し木した。土が合ったのか、細かった一枝は瞬く間に伸びて数年後には大人の背丈ほ

どに成長し毎年春になるとたくさんの花をつけた。早春の南アルプスの雪の色をしているので私は勝手に「龍太椿」と名づけて大切にしていた。それから幾年か後宮崎に転居することになった。「龍太椿」だけは手放したくなかつたので、枝を一本折りハンドバッグに忍ばせて宮崎入りした。南国宮崎の日差しにも耐えて植木鉢の中ですくすく育ち毎年数え切れないほどの花が咲き「性格の良い木」を証明して私を喜ばせてくれた。

そして一昨年の春、椿にすれば三度目の引越し、植木鉢ごと神奈川県に越してきた。

海辺のベランダなので、たっぷり水も肥料も注いでいたつもりだったが……。思い返すとこの椿に導かれるように多くの文学関係の方との出会いがあり私にとってはまさに幸福の木であつた。もう椿は枯れたけれど南アルプスの雪の色をした「龍太椿」はこれからも私の胸から消えることはないだろう。

若きらよ強く伸びゆけ

谷村 鯛夢

(会 員)

東京都という自治体は、いわゆる23区のほか、多摩地区と呼ばれる西部に広がる地域を持っている。そこは、23区と区別して、都下と呼ばれることもある。具体的な地名では、大ターミナル・吉祥寺を擁する武蔵野市、神奈川県に食い込む町田市、多摩川上流の青梅市といったところがすぐに思い浮かぶ。

そして伝統的呼称、つまり昔の「郡」でいえば、たとえば町田は南多摩、青梅は西多摩、武蔵野は北多摩ということになる。

この南、西、北の「三つの多摩」地域を称して、「三多摩」というわけだが、東京以外ではあ

まりリアリティのある地域呼称とは言えないだろう。西日本出身の私などは、最初、「さいたま」と聞き間違えたし、「さんたま」と聞いてどういう字を書くのかもイメージできなかった。

しかし、地元の人々はもともと大消費都市・江戸の周辺農村として生き抜いて来た歴史を背景に、この「多摩」あるいは「三多摩」という呼び方に独特の愛着を持っていることが分かる。そうした三多摩の中でも、北多摩はとりわけ農村ニュアンスが強いところだが、私が現在住んでいる清瀬市などは緑も多く穏やかな環境で、実に住みやすい町だと思っている。

都知事選挙や都議選挙の際の公約に「多摩格差解消」なる一項があるのを目にしたときなどに、「へえ、23区と何か格差があるんだ」と思うくらいで、毎日気楽に暮らしている。

その北多摩には国立とか武蔵村山とか東久留米とか、小さな市がまさに目白押しのように隣り合っているが、中でも清瀬が一番小さいのではないだろうか。住人の私が「ほんとに小さな町だよなあ」と実感することがよくあるのだが、

谷村 鯛夢（たにむら・たいむ）



1949年（昭和24年）高知県生まれ。同志社大学文学部卒。婦人画報社勤務の後、出版プロデューサー

し、俳人。著書に『漂異紀畧（ジョン万次郎口述）全現代語訳』『胸に突き刺さる恋の句』『脳活俳句入門』『俳句ちよつといい話』『らんまんの笑顔―人間・牧野富太郎―伝』

何しろ、車で走っていると、すぐ隣の市域に入ってしまう。

東京の「市」の中で、面積の一番小さいのがこれも北多摩エリアの狛江市、人口が一番少ないのは西多摩エリアの羽村市というのは知っているが、たぶん清瀬市は、「小ささ」でも「少なさ」でもベスト5に入るのではないだろうか。

しかし、この小さな町は、ある医療事情で昭和以降、日本中に知られる町になったという歴史を持っている。昭和の30年代まで、国民病、そして「死に至る病」として恐れられた結核の療養施設がこの町に多く作られたからである。

昭和6年の東京府立清瀬病院がその始まりで、以降、現在の清瀬駅南口の前にあった自然のままでの「武蔵野」の雑木林の中に、公立、国立、あるいは軍関連の結核療養所が次々と建てられた。当時は「転地療養」という言葉があったくらいだから、「清瀬」は地名にたがわず、きっと東京都で一番空気のきれいなところだったのだろう。

そして、施設内ではまさに無聊を慰めるように、患者の文化活動も盛んに行われた。そこに

はあの純文学の鬼・福永武彦や、のちに直木賞作家となる結城昌治もいたし、吉行淳之介はベッドの上で芥川賞受賞の報を聞いた。また、隣の東村山市域まで伸びた施設には若き日の藤沢周平もいて、療養の中で俳誌「海坂」に投句していた。

十七音の俳句が、体力のない患者たちには絶好の文芸だった。

その清瀬で「石田波郷俳句大会」という催事が始まったのは平成21年のこと。昭和俳句史に大きく名を刻む石田波郷は「雁かりひねのこるものみな美しく」と詠んで出征した中国戦線で肺を病む。そして、戦後は長く清瀬の結核療養所で闘病し、その病棟で死するまで「病中吟」「境涯俳句」の名句の数々を残した。「七夕竹惜命しやくみょうの文字隠れなし」。清瀬市「石田波郷俳句大会」はそうした縁にちなみ、波郷没後40年を契機にスタートした。

波郷は清瀬での闘病、療養の中で、清瀬中学の校歌も作詞している。波郷作詞の校歌はかなり珍しいのではないかと思われるが、たまたまその清瀬中学の隣に住む私は、すっかりこの校

歌のファンになってしまった。

ゆたかなる黒土うちて

胸ふかく培う種子に

ふりそそぐ日のささやきは

若きらよ強く伸びゆけ

若きらよ強く伸びゆけ

いい校歌である。「ゆたかなる黒土」は三多摩の象徴。死と隣合わせの病床から、波郷は「若き者たち」に「強く伸びゆけ」と呼びかけた。

そう、波郷は「病中吟」だけでなく、その若き日に「バスを待ち大路の春をうたがはず」などと詠んで「青春俳句」のスター俳人となった人であった。そして、その系譜を追うように、「石田波郷俳句大会」新人賞は、俳壇の芥川賞と目されるようになり、平成、令和の若き俊秀を輩出してきた。

さらに昨年から大会は、その新人賞にジュニア俳句賞を加えた形に特化して、世界中の「若きら」にもっとも「強く伸びゆけ」とエールを送っている。

スイスからの航空便

深尾 凱子

(会 員)

昨年の暮、一通の分厚い航空便がスイスから届いた。差出人はチューリッヒ大学の歴史学部で、助手として勤めながら博士論文に取り組んでいる、Mさんという日本人女性だった。手紙は思いがけない内容だった。

画家・民俗学者だった私の父、染木煦（あつし）の遺作や生涯について深く知りたい、というものだった。父は他界してもう三十五年になる。「論文のテーマは、ドイツの旧植民地に於ける美術と建築、人々の暮らし、についてです」に始まる手紙には、研究を進める過程で、染木が残したミクロネシア群島の油彩画やスケッ

チ、民俗学研究論文、著書などに深く興味を持ち、年明けに資料収集のため一時帰国した際、遺族から詳しく話を聞きたい旨が綴られていた。

マリアナ、カロリンなどの島々から成る太平洋の島嶼（とうしょ）国、現在のミクロネシア連邦は、戦前は「南洋群島」と呼ばれて日本の委任統治領だった。それ以前はドイツの植民地だったのである（更にそれ以前は英国領）。ところが第一次世界大戦（一九一四年）の結果、日本がドイツから占領。その後のベルサイユ平和条約によって日本の統治下に置かれた。南洋庁が設置され、パラオ、サイパン、ヤップ、ト

ラックに支庁が配備されて、最盛時には八万人余の日本人が居住する人気の地となった。というがこの群島の歴史のあらましである。川端龍子、赤松俊子、布施信太郎など、多くの芸術家たちがこの地を訪れて作品を残している。

染木が「南洋群島」に出かけたのは、一九三四年。東京美術学校（現・芸大）西洋画科卒業後七年目。結婚して二年目の母と、一歳の私を残して七か月間の旅に出た。目的は、「南洋群島」

深尾 凱子（ふかお・ときこ）



1933年東京生まれ。東京大学文学部英米文学科卒後、読売新聞社入社。米国アイオワ大学大学院ジャーナリズム学科に留学。三十四年の記者生活後、埼玉短期大学教授、茨城県女性プラザ館長を歴任。著書に『女の日常生活』『私らしくコミュニケーション』『タカナことば』など。

の探訪と民具の収集で、帰国後は現地をテーマにしたたくさんの油彩画や版画、スケッチを制作した。収集した約三百点の民具類は寄贈されて現在は大阪の民族学博物館に所蔵されている。Mさんの手紙には次のような一節があった。

「とりわけ興味を引かれたのは、ミクロネシア旅行中に、愛子夫人への手紙という形式での、現地の風土、住民たちの生活や素顔などを鮮やかな記録にまとめた『書簡に託した染木煦のミクロネシア旅行』（求龍堂刊）という書物です。インターネットで見つけ、スイスから注文して拝読しました」

この本は父の没後二十年に私たち遺族が監修して刊行した。「美術家たちの南洋群島展」（町田市立国際版画美術館主催、二〇〇三年）出品準備のためアトリエ内の遺作の山を漁っていた際、発見したのは父の若き日の南洋旅行日記だった。それを収めた埃にまみれた封筒には筆でこう書かれていた。「日本は戦争の結果ミクロネシアを失った。この紀行は其の以前のものである。今にわかに出版は不可能であるが、我が生涯の記録として保存する。一九四六年一月二十

九日」

中から現れたのは母への手紙の形式で、便箋にびっしり書かれた旅行日記の一束だった。「三月七日。横浜出発の際は御見送り有難う。筑後丸は小さな割に整った船で、一等船室の客は外人一人、日本人一人、小生を入れて三人。一時頃観音岬通過。ペルリの来た浦賀、続いて三浦三崎。東京湾を出ると駆逐艦が走っていて、本艦と行き会々と船尾の国旗を上げます。小生の心は希望と喜びに満ちています。この幸福を直接貴女に話すことが出来ないのが何より残念です」(第一便より)

「三月十一日。サイパン島がだんだん濃く見えて来ました。これからも沢山通信します。日々の印象が薄まらない内に書きます。後日帰郷後は生々しい土産話は出来ませんから大切に保存して下さい」(第四便より)

そして以後次々と送られた手紙には現地の人々の生活、植物、魚、民具、建物などについての話が多数のスケッチを添えて綴られている。Mさんの来訪に備えて、改めてこの紀行を読み直していた際、思想史家の渡辺京二氏の死去

がニュースで報じられた。幕末・維新期の、欧米人の日本滞在記を手がかりに、日本の近代を問いつけた、氏の『逝きし世の面影』は不朽の名著。私の愛読の書物だ。

一月半ば、『最強寒波』の日に我が家を訪れて来たMさんを、築八十六年の古びた洋館アトリエに案内した。彼女は父の他界後もそのままになっっているアトリエ内に溢れる油彩画など、遺作の山をカメラに収め、私たち遺族の思い出話を丹念にメモしていた。かつてはドイツの植民地、そして日本の委任統治領であったミクロネシアの『逝きし世の面影』を論文の中にどう描くのだろうか。

一月末、スイスに帰ったMさんからお礼の手紙が来た。論文の完成は多分二年先になるという。私は今年九十歳。二年後も元気で彼女の論文を読んでみたい。

エッセー

バタフライエフェクトではないけれど

戸田 桂太

(会 員)

地球温暖化とか気候変動とかいうことばが普通に聞かれるようになったのはずいぶん前からだったと思うが、北極かグリーンランドの氷山が激しく崩れて、大音響とともに海に落ちるテレビの映像を何度見たことか。シロクマの居場所がなくなるといふ予測も聞かされて、地球の壊滅を予測させるような衝撃的な映像だと実感したが、度々見せられているうちに、「ああ、これね…」という既視感が先に立って、地球温暖化への深刻な問題意識とはまた別の感想が生まれかねない。

もちろん、専門家が示す学術的なデータを知

れば、現実の気候変動が重大で緊急の課題だといふことは理解できる。南太平洋の海水温の上昇と日本列島に毎年被害をもたらす集中豪雨の因果関係のメカニズムにも、そうなのか…と思ひ、北の海のシシャモの不漁も海水温の上昇が原因と知れば、漁業関係者に同情しつつ、シシャモが食えなくなるかとの心配が先立つ。

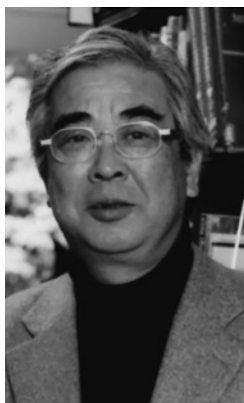
まあ、危機的な未来を予測させる事態だと知らされても、日常的な生活感覚では「理解」の程度はそのくらいものだ。

ただし、地球温暖化に関連するののかどうか怪しいものだが、昔と比べて、現在の気温の上昇

を実感することはよくある。

私は東京で育ったが、子どもの頃の東京の冬の朝は今よりもずっと寒かったという記憶はある。朝学校へ行く時、冷え切った運動靴に足を突っ込んだ瞬間のヒヤッとした感触は今も忘れがたい。かじかんだ手指に息を吹きかけ、白く光る霜柱を踏んで歩く、冬の朝の寒さの記憶は鮮烈だった。今の子どもたちにはその経験はないだろう。そういえば、冬の朝、霜柱というもの

戸田 桂太（とだ・けいた）



1940年東京生まれ。早稲田大学文学部仏文専修卒業後、NHK撮影部に勤務。退職後NHK出版で

『放送文化』編集長など雑誌や書籍編集に従事。2002年より武蔵大学社会学部教授、映像論などの講義を担当。2009年退職。武蔵大学名誉教授。映像分野の研究論文の他、著書に『東京モノクローム』など。

を見なくなって久しい。

もっとも、この記憶は終戦直後のことで、今とは違って身に付けている衣類も粗末なものだったし、暖房なども比較にならないから、これを国連の会議で議論しているような地球温暖化問題につなげるのは疑問かもしれない。

とはいっても、温暖化の影響だと思われる現象はいろいろある。私は子どもの頃からの昆虫マニアで、蝶の生態観察は今も続けているのだが、その私の印象では、二十世紀が終わる頃から、東京ではそれまで見かけなかった暖地系の蝶をよく目にするようになった。

ある夏の午後、庭のレモンの樹の周りを飛んでいる黒い大きな蝶を捕まえた。クロアゲハだ：と思っって捕虫網の中を見ると、左右両翅の真ん中に大きな薄い黄色の紋がある。驚いたことに、それはモンキアゲハだったのだ。

モンキアゲハは暖かい気候を好む暖地系の蝶で、私の子どもの頃は、生息地の北限は神奈川県三浦半島付近といわれ、逗子の神武寺の森が東京から一番近いモンキアゲハ採集の適地などという蝶採集ガイド本の記述も覚えている。

モンキアゲハが庭に飛んできたことに少し驚いて、この時は写真を撮って放したが、その後都内のいろいろな場所で、飛んでいるモンキアゲハを見かけるようになった。分布範囲が三浦半島よりも北上しているのは間違いなく、偶発的な例ではないと確信した。

もうひとつ例を挙げると、ツマグロヒヨウモンという蝶の分布の変化についてだ。この蝶も南方・暖地系の種類で一九八〇年代以前の蝶類図鑑では、関西以西とか本州近畿以南に生息するとしている。しかし、二〇〇六年に発行された白水隆著『日本産蝶類標準図鑑』にはへ：本種はかなり以前から北進の傾向を見せていたが、(中略)中部地方、関東地方で1990年代から分布を拡げ、一気に個体数が急増したとある。図鑑の解説が大きく変わっている。

私が東京でツマグロヒヨウモンをはじめて見たのは、二〇〇〇年より少し前だったと思うが、蝶の採集に夢中になっていた少年時代にはこの蝶は東京には全くなかった。

飛んでいる姿を見たこともない図鑑だけの知識ながら、メスの前翅の先端の大きな黒い模様

が特徴的で、東京の蝶愛好少年たちの誰もが名前だけは知っている蝶だった。それが今や東京で普通に飛んでいるのである。

特に夏の終わりから秋に数を増す。今では秋が深まる頃、東京の市街地で一番たくさん飛んでいる蝶ではないだろうか。ヒヨウモンチョウの名の通り、明るい橙色に黒い斑点のある豹柄の模様が秋の日差しに映えている。

ヒヨウモンチョウ類の幼虫の食草はスミレだが、ある種類のスミレだけを食草にするヒヨウモンチョウがいる一方で、ツマグロヒヨウモンの幼虫はといえば、スミレなら何でもよし、パンジーやビオラのような園芸品種も食草にする。庭や公園の花壇の植栽事情もこの蝶の分布拡大を加速させているのかもしれない。

とはいえ、ツマグロヒヨウモンが東京でも普通に見られるようになったのは気候変動という大状況での小さな結果であるのは間違いない。

昆虫界のこの異変を知ると、その原因と結果の順序が逆サマなのは承知の上でいうのだが、つい、バタフライエフェクトなることばが私の脳裏をよぎるのである。

エッセー

いのち

蜷川 真夫

(会 員)

「蜷川さんはインド初の試験管ベイビー取材をされた方ではありませんか？」

数年前、会社に通のメールがインドから届いた。コルカタ（旧カルカッタ）の研究所にいる日本人青年からだった。彼は日本の大手食品会社研究者で、NGOから1年間インドに派遣されていた。研究所の所長は84歳の博士、食品冷凍保存の専門家だ。

「30数年前に会ったNINAGAWAを探してくれ」

青年は毎日のように博士からせがまれる。1978年10月、私は朝日新聞の特派員とし

てインドの首都ニューデリーにいた。「カルカッタの病院でインド初の試験管ベイビーが誕生」とインド各紙が報道した。67日前の7月に英国で世界初の体外受精児ルイーザちゃんが誕生、世界的大ニュースとなった。インドでの誕生が本当だとすると2例目の「快挙」。しかし、ニュースの扱いは冷たい。

「停電の多いインドで卵子の冷凍保存が可能なのか」

「そもそもインドに高い技術があるとは思えない」

外国での評判も芳しくなかった。生命倫理を

問う声もあった。私自身も、完全に肯定する気持ちになれなかった。何か引っ掛かる。

私は研究チームのリーダー、スバシユ・ムケルジー博士に取材依頼の手紙を書いた。

ベンガル州立病院は大きく、清潔な施設だっ

蜷川 真夫（にながわ・まさお）



東京大学社会学科卒業、朝日新聞社で社会部、外報部記者、アエラ編集長、インターネット編集など歴

任。1997年に株式会社ジェイ・キャストを設立、代表取締役。J-CAST ニュースなど独立系のネットニュースを配信している。主な著書に、『田中角栄は死なず』（徳間文庫）、『インド人力宇宙船』（朝日文庫）、『欺かれた法廷』（朝日新聞社）、『ネットの炎上力』（文春新書）、『デマ映えの民主主義』（かもがわ出版）。

た。受付のロビーに噴水があり、等身大のクリシュナ像が立っている。病院の入り口に神像、そこがインドだ。

博士は研究施設を案内し、研究室で「さあ、何でも聞いてくれ」と言った。

もちろん、停電の多いカルカッタ、あるいは高度な機材があるとは思えないインドでという、失礼な質問もした。おびただしい数の経験によって獲得した小さな技術の積み重ねで成功したのだと感じた。その後の成功例は何年間もなかった。その背後には夥しい失敗例があったのだ。

ムケルジーチームは何年にもわたって動物実験と並行して人体でも実験した。排卵を促進する性腺刺激ホルモンを投与、その3日後に膣を通して卵巣から卵子を取り出す。成功した時は卵子5個、培養器で母親の15%の血清とパラフィンで保護した。この方法だと、英国の手法より安全だと博士は言った。

過激な左翼政権の州政府が調査委員会を設置、「信用できない」という結論を出した。博士は一切の取材を拒否していた。私の取材に応じたのは日本人記者だから公平だろうと言った。

生後4ヶ月のドウルガちゃんの家は病院の近所で、おしめを干した庭の奥から夫妻が出てきた。ベッドには目がくりくりした元気な赤ちゃんがいた。長年、何回もの失敗の後に生まれたのがドウルガちゃんだった。

ムケルジー博士の家で夫妻の歓待を受け、美味しいカレーをご馳走になった。

博士は最上級のカーストに生まれ、医師の家庭に育った。穏やかな人柄と感じた。一連の取材は私にとって納得できるものだった。特集欄を埋める大きな記事となった。「成功まで長年の努力、偏見の背景には誤った科学信仰」の見出しだった。

東京に帰任した後も博士と交流があった。京都大学がシンポジウムのゲストに博士を招く計画を聞いて嬉しかった。ところが州政府は博士の出国を拒否、オーストラリアからの招待も州政府によって拒否された。

帰国した翌年、新聞の小さな記事が目に入った。ムケルジー博士の自殺だった。周囲の圧力に耐えられずとは思ったが、もやもやは頭の片隅から離れなかった。

研究所長から直接のメールが届いた。研究所長はムケルジー博士のチームで冷凍保存を担当した研究者だった。ムケルジー博士の自殺後もその名誉回復のために闘っていた。

「彼は壁に押し付けられた。もう、展望がない。自殺しか残された道はなかったのだと思う。経緯はこれから送る私の本を読んでくれ」

大量の文書が送られてきた。2002年、インド医学研究審議会はムケルジー博士の第2号ベイビーを研究成果と公認した。世界的権威医学人名事典の千百人にも選ばれた。インドではドウルガちゃんから8年後に第2号の体外受精児の誕生があり、担当したボンベイの医師がドウルガちゃんの両親に会うなどしてムケルジー博士の成果を確認したことが後押しになった。博士の悲劇は映画にもなった。

どうしても私に知らせたいという研究所長の執念は私に通じたが、昨年、所長の死が知らされた。

所長から聞いたドウルガさんのアドレスにメールを出した。インドの生殖医療技術、不妊の問題を文化人類学の視点で研究している国立民

族学博物館の松尾瑞穂教授がインドを調査する機会にドウルガさんに会ってほしいと思ったからだ。

インドから返信が来た。

「ハーイ、元気ですよ。あなたかどうか分からないけど、波と船を描いた絵葉書を貰ったのを嬉しい思い出としています。インドの日常社会は、医学界や政界よりずっと包容力があります」
両親に手土産として渡した浮世絵の絵葉書を喜んでくれていた。

政府の調査では2020年に日本で生まれた子どものうち13、14人に1人は体外受精によるものだという。

再会、そして

「喜寿まで新年の挨拶は続けようと思っていたが…」と、会社時代の先輩から年賀状じまいの連絡を受けたのは三年前だった。還暦を迎えるころ前立腺がんの全摘手術を受け、再発や転移で厳しい闘病が続いていることを聞いていたから、以来こちらも手紙を出すのは控えてきた。気が変わったのは、毎朝一点ずつ俳句や短歌を紹介する新聞の小さな欄に彼の句が十日連続で載ったからだ。

病を得て通い出した山間の湯治場での心象風景を詠んだ、最近出した句集からの十句だった。同じ病気を経験している私にはどれもが心に沁

桃井 恒和

(会 員)

み、感想をどうしても伝えたくなくなって迷惑をかえりみず手紙を送った。その中で私は一番気に入った一句を挙げて、「返信は無用です」と結んだ。返事はないものと思っていたら、十日ほどして見慣れた万年筆文字の封書が届いた。そこには、一番好きな句はという私の言葉に「飛び上がりたくなりました。返信無用などと言わずこれから」とあって、離れ離れになった相手とまためぐり会えたような嬉しさを覚えた。

ある女性と五十三年ぶりの再会をしたのは、それから間もなくのことだ。大学時代に研究室の世話をしてくれていた女性である。私の親友

と真剣に付き合っていて、結婚するに違いない
と思っていたのだが、二人は結ばれなかった。
でも私とは、年賀状のやり取りが卒業後も続い
ていた。

その彼女から、「新聞社の書道展に入選し上野
の美術館で展示されます」と知らせが舞い込ん
だのだ。この機会に会えるなら、というメッセ
ージだと思った。彼女が会場に来る予定を確か
め、「作品を見せてもらったあとお茶でも」と待
ち合わせの約束をした。

桃井 恒和（ももい・つねかず）



1946年横浜
生まれ。読売新聞
の社会部長、東京
本社執行役員など
を経て、2004
年から12年間、読

売巨人軍の社長や会長。著書に『スコアブックの余白』
『使うあてのない名刺』（いずれも中央公論新社）など。

その日――。早めに美術館に着き入り口付近
を見まわすと、七十代と思われる女性が人待ち
顔で立っていた。しかし、マスクをしているし、
記憶にある彼女よりかなり小柄で、どうも違う
らしい。そうして十五分ほどが過ぎ、私は彼女
から聞いていた携帯番号に「もう着いてます」
とショートメールを送った。そのとたんマスク
の女性が、手にしたスマホを見て、こちらへ視
線をよこした。

いくつもの部屋に分かれた会場は、入選作が
所狭しと飾られていた。彼女のは「さくら咲く
遠山鳥の」と始まる新古今集の後鳥羽院の歌だ
った。それを見て喫茶室に移り、マスクを外す
と、たしかに面影は残っていた。やや低い声音
はまさしく本人のものだった。

彼女には夫と、独立した娘・息子がいる。五
十代のころは、電子機器メーカーの技術者だっ
た夫に従い三年をフイリピンで過ごした。住み
込みのメイドがいて、やらなければならぬこと
とは何もなかった。「毎日ゴルフばかり」と彼女
は楽しそうに振り返った。

その夫が、全身の力が段々なくなっていく難

病を発症したのは、退職して七十歳を過ぎたころ。初めはゴルフでちよつとふらつき、山歩きの尾根道で足を踏み外しかける程度だった。だが七年たった今、家の中でも歩行器を使い、発声がわかりにくくなって「宇宙人と会話してみたい」。微笑さえ浮かべ彼女は言った。夫を残して出かけるときは、店屋物を自力で受け取れない夫のため、作り置きしていくか、食事の準備に間に合うよう急いで帰るしかない。作品を見てお茶と持ちかけたときも、「東京駅で五時ごろの電車には乗らない」と言っていた。

が、きょうはパックのおすしを置いてきたから少しくらい遅れても、と話は続いた。

薬も治療法もないまま衰えてゆく夫を見守りつつ始めた書道。家では、夫が起き出す前の早朝、食堂のテーブルに和紙を広げ練習をする。そんなさなか今度は自分に乳がんが見つかり、手術を受けた。落ち込んだ気分の中で、入るわけはないと初めて作品を出したのが今回の公募展だった。

約半世紀ぶりの再会でも、触れてはならないと思っていたことが一つあった。結婚に至らな

かった親友の話。食品会社をリタイアした彼は、六年前に妻を亡くしていた。私はこの夫婦のことを自分のエッセイ集の中で匿名で書き、その本を彼女も読んでいた。食品会社の親友と来れば、彼だと彼女も気づいただろう。でも、送られてきた感想には、そのことは書かれていなかった。

「あの本に出てくる奥さんを亡くした人……
○○さんでしょ」

帰りの時間が近づいたころ、不意に彼女が親友の名を口にした。「私たち結婚すると思ってました?」。私が「まあ」と曖昧に答えると、「お元気なんですよ」とまた念を押すように訊いてきた。

あれから私には私の五十三年があり、彼女にも親友にも、それぞれの五十三年があった。夕暮れの東京駅で、「じゃあ」といつも会っている者同士のように別れて後ろ姿を追いつながら、こんな再会の日が多分もう来ないのだろうと私は思っていた。

エッセーを募ります

会報「冬号」(電子版)に掲載

今年も会員の皆さまのエッセーを募ります。クラブ創設60周年記念で募集して以来、13年連続13回目の企画です。応募作品は、会報「冬号」(電子版)に掲載されます。締め切りは9月末です。奮ってご応募ください。

冬号が電子版に模様替えして、5年目になります。会報を広く社会に発信することで、クラブの認知度、存在感を高め、若い世代にもアピールするのが狙いです。会報発行にかかわる経費の節減にもなります。

応募エッセーのテーマは自由。要領は下記の通りです。できるだけ多くの会員の作品を紹介したいと存じます。とりわけ近年、クラブに入会された方々には、自己紹介、近況報

告の意味合いも兼ねて、ぜひご応募くださるようお勧めいたします。一方で、多くの会員の参加を歓迎する趣旨から、2年(2回)連続の応募は遠慮いただいております。一昨年(前々回)応募された方にはなんの制約もありません。

応募要領

- ・ 本文は1600字。
 - ・ 200字以内の略歴を添付してください。
 - ・ できるだけメール添付でお願いします。
 - ・ 応募原稿は原則としてご返却いたしません。
- ※詳しくはクラブ事務局まで。

(理事会)

第71回クラブ賞

5月31日に受賞作発表

第71回日本エッセイスト・クラブ賞の審査は3月中旬から始まりました。

同クラブ賞は、1952年(昭和27年)に創設されて以来、今年で71回目を迎えます。クラブ会員および出版社から推薦された作品を対象に、3月から5回の審査をすすめます。

受賞作が決まる最終審査委員会は5月30日(火)を予定、翌31日(水)の各新聞朝刊で受賞作を発表いたします。

なお、クラブ賞贈呈式は6月26日(月)、千代田区の日本記者クラブ会見場で、午後3時からの総会に引き続き、3時半から開催される予定です。



へクラブ賞候補作推薦ハガキよりン

読売の先輩森脇逸男さんのご推薦で入会させていただいてから、足掛け7年。88の米寿を慨嘆しています。北海道はこの冬大雪で、杖をたよりの散歩もままならず。キタキツネが窓から覗き、アカゲラが餌台をつつく札幌郊外の茅屋で、読書三昧の越冬でした。

(若林 滋)

心臓にペースメーカーを入れて一年。余り遠出も出来ず、読書の毎日です。司馬遼太郎さんの講演集に導かれ、正岡子規の「病状六尺」など再読。狭い生活空間の中でも発見を！と心がけています。

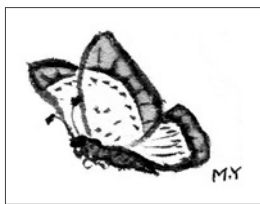
(武本 宏二)

目が不調になり、少々不自由しています。

(太田 愛人)

生きているように死んだように生きていて、週に二度は市街に出て諸方をまわり、コーヒーを飲み、新聞を読み、本を読み、店を第二書齋にしている。はがき、手紙を書き、たのまれたものを書き、褒められもせず、苦にもされず、これが九十の日常です。

(菊澤 研二)



ワイフが夜中にトイレの中で転んで脚のつけ根を二か所骨折。入院。コロナのせいで見舞い禁止、私は腰痛を抱えて孤独な生活を強いられています。50歳を過ぎ若い頃より5センチ以上身長が縮んだ人は骨粗しょう症だそうです、ご用心。多忙で本が読めません。

(中村 政雄)

「食が壊れる」(文春新書) 刊行。
「堤未果のショックドクトリン」(幻冬舎)「ショックドクトリン」(1000分de名著テキスト)(NHK出版)

(堤 未果)

俳句結社「炎環」の同人会会長をつとめておりますが、政府等からの行動制限指示が出なくなつて以降、一気に「リアル句会」が復活しました。やつぱり飲み会や句会は「ズーム」や「ネット」等の冠なしがよろしいようです。

(谷村 綱夢)

白内障の手術を控え抗生薬を朝昼晩と寝る前に点眼しておくよう指示されて、「食前ですか、食後ですか」と訊きかけ自分で笑ってしまいました。目にさすのに食前も食後もないですからな。

(桃井 恒和)

イランや日本の博物館に涙壺がある。形はチュリップ状、息子や夫、兄弟を戦場に送った女達が悲しみの涙を溜めておく、と聞いたが、そうではない。「涙の文化学——人はなぜ泣くのか」(今関敏子)を面白く読んだ。

(栗生 將信)

がんばって万葉集の注釈書書いてます。全体の五分の一くらいです。

(上野 誠)

90歳になりました。コロナ禍で皆さまのお話を直接伺えないのは淋しいことです。私自身は自家本ですが二冊書きました。会員であった、故小塩節さんは学生時代からの友人でしたし、やはり「会う」ことは大切なのだと思っています。

(岡 佳津子)

この頃は随筆を依頼されることも無いので、公園の掃除で思いつく様々なこともポリ袋(ごみの)に放り込んでいる日々である。

(加固 康二)

私は今年九十三歳。私の唯一の健康法は「歩くこと」で、雨さえ降らなければ毎日外へ出て、四千歩から五千歩は歩いている。二足歩行で成長した人類は歩けなくなったら成長がストップし、あとは寝たきりが待つだけ。毎日歩くことは、人間が生きていることの「しるし」であり、これからも生き続ける人間の義務な

のではないだろうか。(山本思外里)
一年かけて準備したエッセイ集『ことばの匂い』(幻冬舎)がようやく4月20日発刊予定となり、書きためてきたコラムを選択してひとつにまとめることができました。過去15〜20年間の集大成ともなり、ひとつ山を登りおえた感あり。

(竹本 祐子)



昨年ご縁があり、宮崎県立美術館にて、日中国交正常化50周年記念として、日中交流書画篆刻と書の展覧会が催された。二人の中国人と一人の日本人の構成である。二人の中国人は、260年続いた清朝時代を興された満州民族(中国東北部遼寧、

吉林、黒竜江省の一带、モンゴルなど)であって(お一人は黒竜江省、お一人はモンゴル出身)であり、言わなければ清朝の末裔とも云えるのではないか。私も、黒竜江省で出生し、戦後、帰国したものである。そう言うことで、現在、清朝時代(特に雍正帝)の働きなど研究してみたい。と思うところである。なお、展覧会は本年も同様に宮崎にて8月催されると言うことである。(森本 雍子)

(高階 經和)

小説『あん』がフランスのリヨン第3大学より、翻訳作品賞(Prix Caméleon 2023)をいただきました。

(ドリアン助川)

「実家の古文書すらすらよめるかも」新年直後の新聞の見出しに心躍りました。更に「くずし字精度90%」と続きます。この五年間、次作のた

めに、くずし字の解説に時間を費やしてきましてので、期待が増します。何とAIが学習を重ねた結果、三月には、解説スマホアプリで寸時に読み取れるようになるそう。ただ、私には明治の作家達のくせ字や悪筆(失礼!)と格闘した日々は、珠玉の“刻”でもあったのですが…。

事務局から

特別維持会費ご寄付のお礼

2022年11月中旬から23年1月上旬までに、次の会員からご寄付をいただきました。ご芳志のほど、心からお礼申し上げます。

(順不同・敬称略)

吉野源太郎 杉溪 一言
大村 智 又吉 國雄
小林 和男 佐藤 幸子

(海老沢小百合)
中央公論より『鍵盤の天皇―井口基成とその血族』を発行しました。破天荒な人生を生きた基成の音楽と修羅に満ちた評伝です。Amazonのレビューで、「著者の修羅もあるのでは？」と投稿され、苦笑いしております。

(中丸 美繪)

新会員推薦のお願い

会員一名の推薦でも審査

当クラブの新会員をご推薦ください。クラブの一層の活性化をはかるべく、会員にふさわしい方をご紹介しますよう、皆さまのご協力をお願いします。

クラブ定款第7条にありますように、正会員となるには、現在の正会員2名以上の推薦を得て、理事会の承認を求めることになっています。

この「2名以上の推薦」という原則は変わりませんが、会員1名の推

新刊「自然をこんなふうに見てごらん 宮沢賢治のことば」(山と溪谷社)が2月に出ております。写真をつんだんに使った美しい本で紙の本のよさが出ています。ご一読下さればありがたいと思います。

(澤口たまみ)

薦でも、理事会に申請していただければ、審査の対象とします。理事会推薦によって、規約の要件は十分に満たすことができます。

エッセイストの意味合いについては、狭義の随筆や随想だけにとらわれず、評論、ノンフィクションなど幅広い分野を対象にしています。

4月現在の正会員は188名です。

なお、毎年のクラブ賞審査で、原則として正会員の作品は対象外ですが、入会の翌年から5年以内に発表した作品は対象になりますので、申し添えます。

(理事会)

新会員の紹介

馬場 鍊成（ばば・れんせい）氏



NPO法人21世紀構想研究会理事長。読売新聞論説委員、東京理科大学の専門職大学院教授などを歴任。著書に『大丈夫か 日本の産業競争力』『物理学校』など。東京都在住。

清水陽太郎（しみず・ようたろう）氏



元住信ビジネスインスティテュート社長、会長。伊藤忠商事秘書室長、伊藤忠燃料取締役、住友信託銀行顧問、東京市民大会会長などを歴任。埼玉県在住。

志田英泉子（しだ・えいこ）氏



文筆業、音楽家。元ウイーン大学研究所研究員、ウイーンナールフォルクスオー

パーソリスト。著書に『ラテン語宗教音楽キーワード事典』『サザエさんキーワード事典』など。東京都在住。



編集工房代表。産経新聞社会部から論説副委員長、正論調査室長を歴任。

元産経新聞厚生文化事業団理事長。著書に『教科書から消えた唱歌・童謡』など。大阪府在住。

健康保険のご案内（2023年度）

当クラブは「文芸美術国民健康保険組合」に加盟しています。加入資格は「当クラブ会員で、文芸、美術および著作活動に従事している方とその家族」です。本年度の保険料は次の通り。

組合員本人（月額）	2万4800円
・医療保険分	1万9600円
・後期高齢者支援金分	5200円
家族（1人月額）	1万4800円
・医療保険分	9600円

・後期高齢者支援金分 5200円
本人・家族共（満40～64歳まで）
・介護保険料（1人月額） 5700円

なお、75歳以上の後期高齢者の方は加入できません。詳細は組合の加入担当係へお問い合わせください。
・電話 03-6811-7293

会員からの寄贈著書

澤口たまみ氏著『自然をこんなふうに見てごらん』

尾崎俊介氏著『14歳からの自己啓発』

※みやぎエッセイスト・クラブから『記憶の手ざわり』作品集27の寄贈がありました。
（12月から3月下旬まで）

2022年度理事会報告

第2回理事会（23年3月30日）

- ・会員の現況報告
- ・2023年度予算案
- ・新役員人事
- ・新入会員の承認
- ・クラブ賞審査委員会について

一般社団法人日本エッセイスト・クラブ定款

(抜粋)

第1章 総 則

(名称)

第1条 この法人は、一般社団法人日本エッセイスト・クラブと称する。

(目的)

第3条 当法人は、エッセイストの親睦をはかり、共通の利益を擁護し、言論の自由を主張し、文化と平和に貢献することを目指すとし、国際文化団体との連携を期する。

(事業)

第4条 当法人は前条の目的を達するために下記の事業を行う。

1. 会員の相互協力
2. 国際文化交流
3. 研究調査の発表並びに講演、見学
4. 会員相互の親睦と相互扶助
5. クラブ賞の選定、その他必要な一切の事業

第2章 会 員

(種別)

第6条 当法人の会員は、次の5種とし、正会員をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（以下「一般法人法」

という。）上の社員とする。

- (1) 正会員 当法人の目的に賛同して入会した個人
- (2) 法人会員 当法人の目的に賛同して入会した法人
- (3) 賛助会員 当法人の事業を賛助するため入会した個人又は団体
- (4) 名誉会員 当法人に特に功労があり、理事会で推薦され、会員総会で承認された者
- (5) 特別会員 当法人の正会員として20年以上継続した者又は当法人が主催するクラブ賞を受賞した者が満85歳になったとき

(入会)

第7条 正会員として入会しようとする者は、正会員2名以上の推薦を得、申込書に会費を添えて理事会の承認を受けなければならない。法人会員、賛助会員は理事会が推薦する。

第3章 会員総会

(構成)

第13条 会員総会は、すべての正会員をもって構成する。

2 前項の会員総会をもって一般法人法上の社員総会とする。
(会員総会)

第14条 当法人の会員総会は、定時会員総会及び臨時会員総会とし、定時会員総会は、毎事業年度の終了後3か月以内に開催し、臨時会員総会は必要に応じて開催する。全会員の5分の1以上が書面により請求したとき、または理事会が会議の目的事項を示して請求したときは、会長は臨時総会を招集し

なければならない。

第4章 役員等

(員数)

第20条

当法人に次の役員を置く。

(1) 理事 15名以上25名以内

(2) 監事 2名以上

2

理事のうち、会長1名、理事長1名、専務理事1名、常務理事若干名、事務局長1名を推薦して理事会の決議によって、理事の中から定める。

3

会長及び理事長は、当法人を代表し、一般法人法上の代表理事とする。

第5章 理事会

(権限)

第28条

理事会は、次の職務を行う。

(1) 当法人の業務執行の決定

(2) 理事の職務の執行の監督

(3) 会長、理事長、専務理事及び常務理事の選定及び解職

第6章 計算(略)

第7章 清算(略)

第8章 附則(略)

役員名簿

会長	遠藤利男			
理事長	(空 席)			
専務理事	秋岡伸彦			
常務理事	栗田 亘	高村壽一	中丸美繪	
	堀尾真紀子	よしだみどり		
理事	秋山秀一	梅津時比古	戸田桂太	
	内藤啓子	原田國男	藤原作弥	
監事	降幡賢一	松田宣子	桃井恒和	
	大高英昭	今野耕作		
事務局長(兼)	降幡賢一			
名誉会長	村尾清一			

* * *

会 員 名

(2023年4月1日現在 254名)

五十音順

あ行

阿川 佐和子	阿部 菜穂子	青木 賢児	秋尾 沙戸子	秋岡 伸彦
秋田 博	秋山 秀一	芥川 喜好	浅川 港	甘里 君香
足立 則夫	有馬 真喜子	五十嵐 佳子	井上 樹彦	池内 紀昭
池谷 薫	伊野 啓三郎	飯塚 恆雄	飯塚 浩彦	市川 桃子
市田 隆文	稲葉 延雄	猪熊 建夫	岩瀬 達哉	上田 篤
上野 創	上野 誠	白井 和恵	鵜飼 哲夫	内池 正名
内田 洋子	梅津 時比古	浦田 憲治	海老沢 小百合	榎本 好宏
遠藤 利男	小澤 秀雄	小曾 戸明子	尾崎 左永子	尾崎 俊介
及川 直志	大井 玄	大塚 義治	大岩 孝平	大城 浩詩
大平 常元	大高 英昭	大谷 克弥	大村 智	大宅 映子
太田 愛人	岡 佳津子	岡田 恵美子	奥山 俊宏	

か行

加固 康二	加藤 恭子	加藤 貞仁	勝方 信一	金井 辰樹
金森 敦子	金子 光美	亀田 泰武	軽部 謙介	河合 弘之
川田 志明	川良 浩和	菅野 光公	城山 邦紀	儀同 保
菊澤 研一	岸 恵子	岸本 康	北村 行孝	久我 なつみ
久谷 與四郎	栗生 將信	栗田 亘	黒川 鍾信	小池 光
小池 英夫	小泉 清	小谷 瑞穂子	小林 和男	児島 宏子
後藤 秀機	今野 耕作	紺野 猷邦		

さ行

さだまさし	佐々木 健一	佐々木 卓	佐々木 満里子	佐田 智子
佐藤 きむ	佐藤 幸子	佐橋 慶女	佐保 田芳訓	斎藤 勇
齋藤 健	齋藤 健次郎	齋藤 博康	柴門 ふみ	坂口 和子
坂本 政謙	坂本 弘道	澤口 たまみ	澤地 久枝	三宮 麻由子
志田 英泉子	志村 ふくみ	塩谷 靖子	清水 陽太郎	下重 暁子
下村 満子	杉江 弘	杉田 定大	杉溪 一言	杉戸 大作
杉山 武子	鈴木 章一	鈴木 博	砂原 和雄	

た行

田中 トモミ	田中 伸尚	田中 秀一	田沼 敦子	田谷 麗子
田和 潤子	高井 潔司	高木 徹	高階 經和	高島 肇久

高村 壽一	竹内 一正	竹中 淑子	竹本 祐子	武本 宏一
谷地 快一	谷村 鯛夢	俵 万智	柘野 健次	辻 由美
堤 未果	鶴ヶ谷真一	D・ゾペティ	出久根達郎	ドリアン助川
戸田 桂太	戸田 淳子	鳥羽欽一郎	東畑 朝子	徳田 正幸
富永 孝子	富山 和子	鳥海 修		

な行

内藤 啓子	中島さおり	中野 利子	中丸 美繪	中村 史郎
中村 政雄	中村 龍介	中山 士朗	長井 好弘	長田 亮一
長友佐波子	長野 安恒	長屋 龍人	並木きょう子	二宮 正之
蜷川 真夫	縫田 曄子	野中 康行	野見山曉治	

は行

長谷部 剛	葉山美知子	羽中田 昌	畑 正憲	馬場 鍊成
畠山 重篤	濱邊 祐一	原 彬久	原田 國男	林 望
樋口 恵子	廣野 眞一	深尾 凱子	福田 章	福田はるか
福原 義春	藤原 勇彦	藤原 作弥	藤原 房子	藤原 正彦
船木 拓生	降幡 賢一	古川 治次	古川 浩	穂苅 正臣
細川 俊夫	堀尾眞紀子			

ま行

前田 浩智	牧 久	牧村健一郎	又吉 國雄	松田 宣子
松本 仁一	松本 俊彦	萬年 浩雄	三島 利徳	水谷 亨
道脇 弘俊	南 砂	宮本 倫好	村尾 清一	望月 照彦
桃井 恒和	森 小夜子	森 孝之	森 武生	森 哲志
森本 貞子	森本 雍子	森脇 逸男		

や行

八百板洋子	八木 美雄	安嶋 明	柳生 尚志	柳澤嘉一郎
柳澤 桂子	柳川 時夫	柳田由紀子	山川 静夫	山形 孝夫
山口 寿一	山口 伸美	山下 健	山藤 章二	山室 寛之
山本 一生	山本思外里	よしだみどり	養老 孟司	横田憲一郎
横田 弘幸	横山 昭作	吉岡 純子	吉野源太郎	吉原 賢二
吉行 和子				

わ行

若林 滋	脇 祐三	渡辺 綱纜	渡辺美佐子	渡邊 満子
------	------	-------	-------	-------

法人会員（順不同）

朝日新聞社	岩波書店
毎日新聞社	講談社
読売新聞社	集英社
産業経済新聞社	
日本経済新聞社	
中日新聞社	
共同通信社	
日本放送協会	
TBS テレビ	

日本エッセイスト・クラブ事務局



日本エッセイスト・クラブ

会報 2023 春 (No.74Ⅲ)

2023年4月24日 発行

発行人 遠藤利男

発行所 一般社団法人 日本エッセイスト・クラブ

東京都港区新橋1-18-2

明宏ビル別館6階 〒105-0004

電話 03(3502)7287

FAX 03(3502)7288

ホームページ <http://essayistclub.jp/>

Eメール info@essayistclub.jp

印刷所 (株)TBSプロウディア

ne
CLUB